

ナオミとルツ

聖書箇所

ルツ記

申命記25:5-10

マタイ1:5

ルツ記の背景

ルツ1:1「さばきつかさが治めていたころ」

士師時代の終わりごろ(サムエルが最後の士師と考えられるので)

士師記のキーワード「そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていた」

ベツレヘムはどんなところ？

パンの家と呼ばれている場所なのに飢饉になる

士師記からルツ記へのキーワード「ベツレヘム」キリストが生まれる場所(ダビデの故郷)

士師記の終わりの方での記述で出てくる地名

エフライムの山地にいたミカという自分で神の宮を持っている人が雇ったレビ人の祭司の出身地がベツレヘム

エフライムの山地に住んでいたレビ人がそばめとしてベツレヘム出身の女をめとったが、そのそばめが実家に帰ってしまい、取り返して戻る際にベニヤミンのギブアで問題が起こる

モアブはどんなところ？

姦淫という意味があるらしい

ロトが娘の姉の生んだ子がモアブで妹の生んだ子がアモン

イスラエルとモアブの関係

申命記23:3-6

3 アモン人とモアブ人は【主】の集会に加わってはならない。その十代目の子孫さえ、決して、【主】の集会に、入ることはできない。

23:4 これは、あなたがたがエジプトから出て来た道中で、彼らがパンと水とをもってあなたがたを迎えず、あなたをのろうために、アラム・ナハライムのペトルからベオルの子バラムを雇ったからである。

23:5 しかし、あなたの神、【主】はバラムに耳を貸そうとはせず、かえってあなたの神、【主】は、あなたのために、のろいを祝福に変えられた。あなたの神、【主】は、あなたを愛しておられるからである。

23:6 あなたは一生、彼らのために決して平安も、しあわせも求めてはならない。

ルツ記の印象(最初にどう思ったかvs後での感想も聞く)

直接的に神がどうしたこうしたということは書かれていないけれど、登場人物を通して、神がどのような方なのか、神の計画や摂理をみることができる。

ナオミの信仰の変遷を見ることができる(ユダヤ人の信仰の持ち方)→でも、結構信仰を持っているクリスチャンにもいえることも

ルツの信仰の変遷を見ることができる(異邦人の信仰の持ち方)

ルツ記

1:1「さばきつかさが治めていたころ」士師記の時代

「この地」ユダのベツレヘム

登場人物・・・ユダのベツレヘムの人と妻とふたりの息子

「ききん」があつて「モアブの野に行く」「パンの家」のはずなのに皮肉

モアブは行ってよいところ？アブラハム、イサクが飢饉の時行ってはいけないエジプトに行ってしまった

しかし、ここでは結果オーライ、ルツを用いるためにベツレヘムにききんを起こされた

1:2登場人物の名前

ユダのベツレヘムの人・・・エリメレク(私の神は王である)

妻・・・ナオミ(快い)

息子・・・マフロン(病気がち)、キルヨン(やつれる)

1:3エリメレクの死

1:4息子がモアブ人の女を迎える・・・していいことかな？しかし、これも神の采配のなせるわざ

オルパ(うなじ)

ルツ(友情)

「彼らは約十年の間、そこに住んでいた」

10年は結構長い、ベツレヘムに帰る気はなかったようだ、10年も結婚していたのに子供がないのはなぜ？もしかしたら、モアブに引っ越して息子二人が死ぬまでのトータルの時間が10年だったのかも。

1:5マフロンとキルヨンの死

ナオミは夫にも二人の息子にも先立たれる(ルツ記の最初の方の主人公はナオミ・・・結構最後まで)

未亡人三人(今でもかなりの悲劇だが、この当時は大変な悲劇)

1:6 悲劇の中の朗報

「主がご自分の民を顧みて彼らにパンを下さったと聞いた」

ご自分の民を顧みてくださる主…直接的に神のことはあまり書かれていない書物だが、間接的にナオミとルツの信仰から神をみることができる

ナオミは嫁二人とベツレヘムへ帰ろうとする

1:7-10旅の支度の途中でナオミは気が変わる、出発してちょっとしてから気が変わった可能性もあり

「母の家へ帰りなさい」…父はどうなってしまったのか？もう死んでしまったのか？父の家だと宗教的に厳しくて、信仰を保てないとか？それとも、父と母が別々に暮らしていた1:13から？出戻りは母の家に行った？

ナオミは二人の嫁が息子と自分にしてくれた親切に感謝して、主が二人の嫁を顧みて恵みを与えることを願っている、つまり再婚できるように願っている

別れの口づけだったのだろうか？

ナオミの提案に対して二人の嫁は「あなたの民のところへあなたといっしょに帰ります」嫁二人の決意(外国に行く)

1:11-13ナオミの反応

申命記25:5-10

レビラト婚(嫂婚、逆縁婚)と呼ばれる制度

1:13「主の御手が私に下ったのですから」とナオミは受けとめている

現実しか見ることができていない、自分の能力の範囲しか見ていない(神の能力が見えていない、私たちもとかくそうならないか？)

1:14娘たちの反応

「声をあげて泣き」ナオミの言葉と現実に対する悲しみ

オルパ(弟嫁、キルヨンの嫁)は、別れて、自分の民と神のもとに帰ることを選択(1:15自分の民とその神のところへ帰っていきました)、自分の幸せを求めて帰った

オルパについて彼女の決断をどう思いますか？

「ルツはナオミにすがりついていた」イスラエルの民と神を選択

ルツについて彼女の決断をどう思いますか？

この決断で後々大きな差がつく…聖書に、「もし、…なら」はないけれど、オルパもルツといっしょにベツレヘムに行っていたら、オルパの方がボアズに気に入られたのかも？とか

1:15ナオミはルツにオルパと同じ選択をすることを勧める…ナオミは神への信仰は持っていたが、現実しか見ていなかった(私たちもそうならないか？)

1:16-18

1:16-17ルツの決意表明、信仰表明

「あなたの民は私の民、あなたの神は私の神」…ここまでルツが言うに至る何かをナオミは伝えることができていたのかも。ここは、ルツの信仰告白として見ることができる。そしてその信仰告白により、それから神がどのように働かれたのかという見方をすることもできる

「主が幾重にも私を罰してくださるように」…誓いまで立てている

現実ではなく、神にすべてを委ねることで後に、見えていなかった神の計画が開いてゆく(私たちは現実を見すぎていないだろうか?)

1:18ナオミはルツの堅い決心をみてそれを受け入れている

1:19a ナオミとルツの旅

モアブの野がどこか良く分からないけれど、食べ物が取れるような所なら、川の近くなんだろうなあと想像するけれど、かなり死海から離れないと川はない。牧師によると、夏場は死海の一部が渡れるようになるということで、二人は死海の北を周ったり南を周ったりせずに、死海を横断した可能性は高い。しかし、それでも年寄りの女と若い嫁の二人にとってはかなりの距離を歩いて？ベツレヘムに行ったはず。山や谷もあったはず。決して、楽な旅ではない。

1:19b ベツレヘムに到着

ナオミたちに対する町の人たちの反応…「町中が二人のことで騒ぎ出し」

ナオミの家族がベツレヘムを去って 10 年が過ぎていたが、ナオミを覚えている人はかなりいた

当時のことだから、外国に長く暮らしていた人が戻ってきたということで、かなりの噂になったはず、しかも外国人の嫁と二人っきりで戻ってきたということで、相当な噂になったはず

真相を聞きだしたい町の人たちが、あれこれ話をし始め、さらに親しい人は実際にナオミに話をし始める

「まあ。ナオミではありませんか。」ナオミという名前の意味が「快い」なので、呼びかけられたナオミにとっては皮肉な話

1:20-21ナオミの反応

「私をナオミと呼ばないで、マラと呼んでください。」ベツレヘムを出る時は、ナオミ(快い)だったかもしれないが、今戻ってきた私はマラ(苦しむ)だと思っている

ナオミが信仰者…すべての事を掌握されている方の存在を認めている…ことがわかる

神への信仰はあるが神への愚痴が綿々とつづられている(ナオミの状況をかنگがえ
ると、同情できるけど。信仰と不信仰の組み合わせ、ここらあたりもイスラエルの信仰
の持ち方っぽい感じ(vs ルツは異邦人の信仰の持ち方)同時に、私たちはどちらかとい
うとルツよりナオミっぽいんじゃないかな？

ナオミの発言を分析・・・ナオミの発言からナオミがどんな信仰をもっていたと思います
か？

①「全能者が私をひどい苦しみに会せた」

②「私は満ち足りて出ていきましたが、主は私を素手で帰されました」

③「主は私を卑しくし」

④「全能者が私をつらいめに合わせられました」

①について、「全能者」は信仰、だがここでは、その信仰心も、神は何でもできる方な
のに、自分にはしてくださっていないという皮肉に聞こえる

「私をひどい苦しみに会せた」は、先のことが見えていないので、ここでは不信仰に聞
こえる、神は憐れみ深く慈悲深い方で、そういう面を見ることもできるのに、そう見てい
ない

②「私は満ち足りて出ていきましたが」これは、嘘でしょう？ 飢饉で食べ物がないから
モアブに行ったのに。その事実が見えていない。「主は私を素手で帰されました」も、
ルツという異邦人の女ではあるけれども、自分を愛し、自分の民と自分の神を自分の
物としてくれるルツを持つことができるようにしてくださった神を見ていない
それにそもそも、ベツレヘムに戻ってきたきっかけも、神がまた食べ物を与えてくださ
っているという噂をきいたからなのに・・・

③「卑しい」という定義が良く分からないけれど、夫や息子に先立たれて、自分の地位
を守ってくれるものがいなくなってしまう、社会的に認めてもらえない存在になっ
てしまったってことかな？ これも後のことを考えると、一時的な事。最終的には、聖書に自
分の名前が残る名誉な計画を神は持たれていたことが見えていなかった。

④またしても「全能者」ということばが出てくるが、これも皮肉っぽい。一時的につらい
目に合わせているだけだということが見えていない。神が計画されているもっと大きい
ことに用いられる器になる時は、通らなくてははいけないつらいこととしてまだ受けとめ
られていない。

1:22ベツレヘムに戻ってきた時期が大麥の刈り入れの時だった・・・これも実は神の
摂理(ボアズとの出会いを神がおぜん立てしてくださった)

ルツを形容する言葉は、「モアブの女」

「モアブの野から帰ってきて」

「モアブ」を繰り返すことで、イスラエルに「モアブ」という異質なものが入ったことが強
調・対比されている感じ・・・ルツ記全体を通して「モアブの女」と繰り返されている、そ
のイスラエルではないものに対しての神の憐れみを見ることになる

やっぱりナオミ(イスラエル)とルツ(異邦人)のこの両輪に対する神のご計画のくすしさ、すばらしさを感じざるを得ない

2:1ボアズ登場

ボアズは誰？ナオミの夫(エリメレク)の親戚、有力者

「有力者」ってどんな定義だったんだろう？お金(土地)がある、地位がある、人に尊敬されている(人望がある)、他の人に影響力がある…ボアズに対する従業員の態度や町の人たちの態度から想像できそう

ボアズの登場で、神のナオミへの計画が一気に進展していく

2:2落穂拾い

「どうぞ、畑に行かせてください。私に親切にしてくださる方のあとについて落穂を拾い集めたいのです。」

ルツは姑のナオミに許可を願う(親に従う、尊敬している、謙遜なルツ)

ルツはイスラエルの律法を良く知っていたこともわかる、貧しいものに手厚くする神の福祉制度のことを知っていた

ルツは現実的な働きもの、賢い女性でもある(箴言 31 章後半の女性を思い起こすことができる)

2:3ルツの落穂ひろいがスタート

「はからずも」という言葉が、すごく際立つ

ルツにとっては、人間の目から見ると「はからずも」なんだけれども、神様側では計画に最初っから織り込み済み、ルツが神に従った時、神の御手、聖霊の導きがあり、神のすばらしい計画へと進むことができる感動の一言！

「エリメレクの一族に属するボアズの畑」神が自分たちの親戚のボアズの畑に導いてくださっていた

2:4

「ちょうどその時」いや、この神様のタイミング！ボアズもこの時、自分が神に動かされていることに気づいてはいなかったはず

「主があなたがたとともにおられますように」

「主があなたを祝福されますように」

ボアズの信仰と人となりを見ることができる

刈る者たちというと、そんなに地位が高い人ではなかったはずだが、その人たちに破格の配慮、信仰者として良い影響を与えている

2:5-7ボアズとルツの出会い

2:5「これはだれの娘か」落穂ひろいをしていた女はルツだけではなかったはずだが、ボアズはルツに目をとめている…神によって目をとめさせられていると言っているのかもしれない

ボアズはキリストの型と考えられているから、キリストが私たちに目を留めてくださった時もこのようであるかも

2:6-7刈る者たちの世話をしている若者の報告

「朝から今まで家で休みもせず、ずっと立ち働いています」ルツが働き者であり、良い評判であることが分かる、だからボアズにも良い報告をしてもらえた(普段の素振りがやっぱり大事だね！)

2:8-9ボアズがルツに声をかける

刈る者たちは日雇い労働者だった可能性は大だから、若い女にちょっかいを出す可能性もある、しかし、できた主人のボアズのところならセクハラに遭う可能性もあまりないし、主人のボアズ本人がしっかり命令を出している(「あなたのじゃまをしてはならないと、きつく命じておきました。」)のでさらに安全

女の召使いにルツのボディガードも頼んでいる(短い間に、やるねボアズ！)

ボアズはルツに身の安全を約束しただけでなく、物質的な配慮もしている。(「水がめのところへ行って、若者たちの汲んだのを飲みなさい」)

いろいろな守りや保証を捨てて、イスラエルに来たルツに神は必要を満たしてくださった。私たちがキリストを選ぶ時に失うものはあるかもしれないが、それに有り余る祝福を下さる神であることを忘れてはならない。

2:10ボアズの言葉に対するルツの反応

自分が外国人であり、ボアズの恵み・憐れみを受けるに値しないことを十分に知っているので、「顔を伏せ、地面にひれ伏し」「私が外国人であることを知りながら、どうして親切にしてくださるのですか」という言葉になっている…その謙遜さが、またボアズのルツに対する思いを大きくしていくんだけど…若い女性の方たちよ、男性に好感を持ってもらうお手本はルツかも

異邦人である私たちに対する神の計らいも忘れてはならない

私たちが神様から自分が値しない恵みを受けていることについて、ルツのような態度がとれているか？

ボアズの先祖には異邦人のラハブ(何代か入っているけれど)、ということは、ナオミの夫の親戚には異邦人ラハブがいたってことだから、どおりでモアブ人と仲良くできるわけだ。ボアズが異邦人のルツに配慮できたり、優しくすることができたりしたのも、そのような影響があったのかも。

2:11-12ボアズの答え

畑(いなか)ではなくてベツレヘム(町)にいたボアズもモアブから来たルツの話を知っていた、なぜルツが来たかも知っていた
ボアズはルツのために神に報いを祈っている

*「あなたのしたこと」とは何？

年を取った義理の母に従った(「翼の下に避けどころを求めてきた」)
故郷の民と神々を捨て、イスラエルの民とイスラエルの神に従った

2:13ルツの反応

素直にボアズの差し伸べた手を受け入れている…信仰者(未信者?)も神の差し伸べた手をこのようにすなおに受けることができたらいいのに
特に異邦人の私たちは、「私はあなたのはしための一人でもありませんのに」という気持ちを持ってはならないと思う
「あなたのご厚意にあずかりとう存じます」「私を慰め、このたはしためにねんごろに話しかけてくださった」神のことを感謝したい

2:14ボアズは勝手の分からぬルツを実際的に助ける

「ここに来て、このパンを食べ、あなたのパンきれを酢に浸しなさい」

ルツが刈る者たちのそばに座ってしまい、取ることができない炒り麦をルツのために取ってあげる、しかもかなりの量を与えたので、ルツはナオミのために持って帰ることができた

2:15-16

ボアズのルツに対する更なる配慮…親切をはるかに超えている

「束の間でも穂を拾い集めさせなさい。」「恥ずかしい思いをさせてはならない」「束からわざと穂を抜き落としておいて、拾い集めさせなさい」「あの女をしかってはいけないう～ん！こんな男性がいたら、女性もいちコロかも。

私たちもここから、一方的な神の愛と恵みを知ることができる

2:17ボアズの配慮とルツの勤勉の成果

ルツが拾い集めた大麦の殻を取った後が1エパあった、つまり23リットルあったってこと。一日の労働で二人が一月十分食べていけそうぐらい集まった。

2:18ナオミに一日の収穫を報告

大麦1エパとボアズからもらった炒り麦…ナオミに全部あげている

2:19-22ルツのナオミへの更なる報告とナオミのアドバイス

ボアズの名を聞いたナオミの反応がすごい…信仰的にダウンしていたナオミの信仰の転機

主の計らいに気づく(「**生きている者(ナオミとルツ)にも、死んだ者(夫と息子たち)にも、御恵みを惜しまれない主**」、ボアズへの祝福を祈る

私たちにとっては、生きている時(豊かないのち)も死んでからも神の恵み(永遠のいのち)を受け取ることができる

ルツにはまだ言っていないが、ナオミはルツが結婚し、子どもを設けることができる可能性に気づいていたはず

ナオミはルツにボアズがどのような立場にある人か伝える…近親者、しかも買い戻しの権利(ゴエル)のある親類の一人

ボアズがルツに話した言葉を聞いたナオミは、続けてボアズのところで落穂ひろいをするのをアドバイス、理由は「**他の畑でいじめられなくても済む**」と言っているが、まだ下心はルツに言っていない

2:23ナオミのアドバイスをきいたルツ

「**大麦の刈り入れと小麦の刈り入れの終わるまで、落穂を拾い集めた**」

大麦の刈り入れスタートは、過越しの祭り(イースター)ごろで小麦の刈り入れスタートは五旬節(ペンテコステ)ごろなので、二か月ぐらいは落穂を拾い集めた。一日で1か月は食べていける分を集めることができたので、2か月で1年分近く集められた計算になる。神の御翼の下に避けどころを求めた異邦人ルツの得たものを考える時、私たちに神が用意してくださったものを見ることができる。また、その間、一方ナオミはボアズに働きかけるのに、いろいろ計画を練る時間があつたはず。

収穫が終わる

3:1-4ナオミが温めていた計画を実行すべくルツに指示を出す。イスラエルのしきたりに詳しいナオミが婚活の指導教官に！

3:1

「**娘よ**」しゅうとめナオミが義理の娘ルツに対する呼びかけ。愛情のこもった優しい声の呼びかけだったんじゃないか。

「**あなたがしあわせになるために**」というナオミの言葉。

*ナオミが「しあわせ」と言った時に、ルツのためにどのようなことを考えていたのだろうか？

1:9「**夫の家で平和な暮らしができるように**」と二人の義理の娘たちに語ったナオミの言葉を考えると、ここでナオミはルツに結婚話を切り出していることが分かる。今も昔も、いやその当時は特に、結婚して子を持つことが幸せと考えられていたはず。社会福祉制度がなかった当時、経済的な保障を考えてもそう。

「**身の落ち着く所**」とは、つまり結婚相手。

「捜してあげなければならないのではないのでしょうか」ナオミは自分について異国の地ベツレヘムまで同行し、これまでの生活を支えてくれているルツに対して母としての責任を感じている。

3:2

「ところで」と具体的に話しを切り出す。

「あなたが若い女たちといっしょにいた所のあのボアズ」若い女はルツだけではなく。その中で、ボアズはルツによくしてくれていることにナオミは気づいていたはず。チャンス有！と見ていたと思う。

「あのボアズは、わたしたちの親戚ではありませんか」親戚、しかも買い戻しの権利がある親戚。結婚し、家や土地を守ることができる可能性を指摘。

「ちょうど今夜」神様のタイミングの時

大麦の刈り入れ時期はペンテコステの時期

「あの方は打ち場で大麦をふるい分けようとしています」収穫を盗人に取られないようにボアズが見張っていることをナオミは知っていた。

3:3-4 ナオミがルツに具体的に求婚の仕方をコーチ。キリストの花嫁になるにはどうすればよいのか教えられているみたい。

*この求婚の仕方をどう思いますか？

これまでずっとこれがイスラエルにおいて、女性の方から律法に基づきゴエルに対して、結婚をお願いする方法なのかと思っていたけれど、3:14以降の聖書箇所を見ると、この求婚の仕方は、そうではなさそうだと思うようになった。イスラエルで一般に受け入れられている求婚の仕方ではなかった可能性がある。もしかすると、ナオミが考えついた方法だったのかも。策士ナオミ！陰でいろいろ工作しているんだよね。

①「からだを洗って」

水の洗礼

②「油を塗り」

聖霊の油注ぎ

③「晴着をまとい」

キリストを着る

キリストとの婚礼の準備万端。

④「打ち場の下って行きなさい」

⑤「あの方の食事が終わるまで、気づかれないようにしなさい」

⑥「あの方が寝るとき、その寝る所を見届けてから入って行き」

⑦「その足のところをまくって」

⑧「そこに寝なさい」

ナオミは、ルツがボアズの寝床まで来て待つのであれば、それを拒むような人ではないことを知っていたのかも。異邦人の私たちがそこまで決心をしてキリストのところに

行くのであれば、キリストが私たちが拒まれることはない。(シドンの女の例)
「**あの方はあなたのすべきことを教えてください**」後は、ボアズに任せればよい。キリストに任せればよい。

3:5 ルツの答え

「**私におっしゃることはみないたします**」ルツの従順さが表れている
私たちはキリストの花嫁として、ここまで言えるかどうか
さらに一歩進んで、言ったことを実行できるかどうか

3:6

「**彼女は打ち場の下って行って、しゅうとめが命じたすべてのことをした**」ルツはナオミに言われた通りに打ち場の下って行き、言われたすべてのことをした。

3:7 実際に、ナオミが言った通りにルツがしていることが分かる。

3:8 女が自分の足のところに寝ているのを気づいたボアズ。

3:9 ボアズはその女性に誰かと聞く。

ルツの返事・・・2:12でボアズの祝福・祈りの言葉を使って、答えている。2:13では、「**私はあなたのはしための一人でもありませんのに**」と言っていたが、ここでは、ボアズを主として、「**私はあなたのはしためルツです**」と自己紹介している。イスラエルの神の翼の下に避け所を求めてきた私に、ボアズ、あなたが覆いを広げて、避け所を作ってください、私を守ってください、とお願いしている。そのあなたの祈りをあなたを通して実現させてくださいませんか。ボアズが買い戻しの権利のある親類であることを根拠に。あくまでもイスラエルの律法に則って。

3:10-13ボアズの答え(普通ではない求婚の仕方をしてきたルツに冷静に対応している所が凄い)

3:10

「娘さん」、「若い男たちのあとを追わなかった」ボアズとルツにかなりの年齢差があった可能性を示す言葉。

あなたの先の真実とは？

ナオミに従ってモアブからイスラエルのベツレヘムに来た。イスラエルの民と神に従った。2:12「**あなたのしたこと**」

あなたのあとの真実とは？

自分の情欲のままに動くのではなく、神が用意されている制度の下に保護を求めてきた。かなり年の差があったのに、ルツはボアズを選んだ。ボアズは、ルツの親孝行も

すばらしいが、聖く誠実な生き方を貫き、自分に助けを求めてきているルツの姿はもつと素晴らしいとほめている。

3:11

「**恐れてはいけません**」ボアズはルツが心配しているのではないかと思い、優しく声をかけている。この一連の求婚の仕方をルツが考えたのではなく、ナオミの差し金だということをボアズは感づいていたはず。しかし、それを実行したルツは相当勇気が必要だったということも気づいていたはず。そういう配慮ができたボアズ。

「**あなたの望むことはみな、してあげましょう**」何かすごくないですか？こんなこと言われてみたいですね。その根拠としてボアズが挙げているのは、ルツがしっかりした女であることをこの町の人々は**みな**知っているからだと言っています。そのような女性になってみたいですね。

3:12問題点

「**もっと近い買い戻しの権利のある親類がいる**」ことをボアズは指摘する。こんなことをすぐに答えることができたことは、意外にボアズはルツのことが気に入っていて、買い戻しの権利を使うことを考えていたのでは？そして、どうすれば自分に有利にそれを使っていくことができるかも、考えていたのかも(4章の話の展開を見て想像するに)。

3:13しかし、ボアズはあくまでも、主の御心に任せることを考えている。でも、しっかりとルツに、自分は必ず買い戻してあげるよと約束している。そして、ルツのことを気遣い、休むように勧めた。

3:14-15

「**だれかれの見分けがつかないうちに起き上がった**」「**打ち場にこの女の来たことが知られてはならない**」と思ったので、ルツがこんなことをしたことがばれてはいけないと思い、ボアズはルツを守ろうとしてる。だから、普通の求婚の仕方ではなかったのではと思う。

「**大麦六杯**」は、結納金？大麦が打ち場にあつたので、大麦だけれども、ナオミに対して、ボアズはメッセージを送っているのでは？食べ物の心配をしなくていい。でも、七杯でなく六杯。ボアズの努力ではその時点では、六杯までしかできないが、七杯目があるかどうかは、それ以降の展開次第、自分自身も動くつもりだが、残りをして下さるのは神であり、その神に結果をゆだねている。そんな暗号をナオミに送ったのかな？

3:16-17ルツがナオミに報告

「[みな、しゅうとめに告げて](#)」一部始終を報告

3:18 ルツへのナオミのアドバイス

ルツを通してボアズからのメッセージを受け取ったナオミ。もしかして、ナオミはボアズのことをよく知っていたのかも。

「[このことがどうおさまるかわかるまで待っていなさい](#)」

「[きょう、そのことを決めてしまわなければ、落ち着かないでしょうから。](#)」

ゆだねた後は、待つこと。そして、必ずそれをしてくれるということについて、ボアズに信頼している。神に信頼している。

私たちも、やることをした後は、神からの答えを待つ必要がある。

結末

4:1 ①ボアズが最初にしたこと

「[門のところへ上って行って・・・](#)」

「門」単なる門ではなく、役所のような働きをする場所

「ボアズは門のところへ上って行って、そこにすわった」ということは、ボアズは役人であったはず。参考ルツ2:1「・・・有力者がいた。その人の名はボアズであった」なので、政治的力も持っていた。

「[ちょうど、ボアズが言ったあの買い戻しの権利のある親類の人が通りかかった。](#)」神様の働きの手を見ることができる。

②ボアズがしたこと

「[彼にことばをかけた](#)」

ボアズは神の備えてくださった機会をきちんととらえて、その親戚に役所に立ち寄ることを勧め、会議のおぜん立てを始める。

4:2

③ボアズがしたこと

「[町の長老十人を招いて](#)」

申命記やヨシュア記などを見ると、「門のところにいる町の長老たち」(参考)申命記22:15)とあるので、門のところには町の長老たちはたむろっていたようなので、その長老たち十人をボアズは招いた。

「それから」ボアズはまず、買い戻しの権利のある親戚を会議の席につかせ、その次に手続きに必要な町の十人の長老を招いて、着々と準備を進めている。

4:3-4

④ボアズがしたこと

買い戻しの権利のある親類の人にナオミの状況説明をする

ナオミが夫エリメレクの畑を売りに出していて、買い戻しの必要があり、第一優先権のある人に買い戻す意向があるかどうか聞き、もし買い戻さないのであれば、その次に権利のある自分が買い戻す意思のあることを伝えている。

その親類の人は買い戻しにまつわるいろいろな結果をあまり考えずに「私が買い戻しましょう。」と発言。

4:5 買い戻しの第一優先権のある人に対し、ボアズはすかさず言います。ボアズがその日の早朝(夜中)にルツと話した時に、ボアズは既にこの殺し文句をすでに考えていたのではないだろうか。ゴエルは「買い戻しの権利」であるが、どちらかと言えば、行使すると、権利より義務が大きい。特にナオミの土地の場合は、外国人、特にイスラエルとは関係が良くないモアブ人のルツを妻としなくてはならない条件が付いてくる。しかも、その間に生まれた子供に自分の相続地も与えることになる。

よくボアズはキリストの予表と考えられるが、ナオミ(イスラエル)とルツ(異邦人)の買い戻しのために、ボアズの払った代価は大きい。しかし、喜んで買い取ろうとしている。

4:6 ボアズの指摘を受けて、買い戻しの権利のある親類の人は、ナオミの畑の買い戻しを断り、ボアズに代わりに買い戻すようお願いしている。「私自身の相続地をそこなうことになるといけませんから。」という理由を述べているが、損得勘定が入っていることが分かる。

4:7 ここに書かれている習慣が詳しく書かれている箇所

参考)申命記25:5-10

25:5 兄弟がいっしょに住んでいて、そのうちのひとりが死に、彼に子がない場合、死んだ者の妻は、家族以外のよそ者にとついでではない。その夫の兄弟がその女のところに、入り、これをめとって妻とし、夫の兄弟としての義務を果たさなければならない。

25:6 そして彼女が産む初めの男の子に、死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルから消し去られないようにしなければならない。

25:7 しかし、もしその人が兄弟の、やもめになった妻をめとりたくない場合は、その兄弟のやもめになった妻は、町の門の長老たちのところに行つて言わなければならない。「私の夫の兄弟は、自分の兄弟のためにその名をイスラエルのうちに残そうとはせず、夫の兄弟としての義務を私に果たそうとしません。」

25:8 町の長老たちは彼を呼び寄せ、彼に告げなさい。もし、彼が、「私は彼女をめとりたくない」と言い張るなら、

25:9 その兄弟のやもめになった妻は、長老たちの目の前で、彼に近寄り、彼の足からくつを脱がせ、彼の顔につばきして、彼に答えて言わなければならない。「兄弟の家を立てない男は、このようにされる。」

25:10 彼の名は、イスラエルの中で、「くつを脱がされた者の家」と呼ばれる。

このケースは、兄弟ではなく親類だが、あまり名誉なことではない。ボアズが買うことが分かっていたので、ひどい目に会わずに済んだのか、それともこの時代には既に形式上の手続きと化していたのか、ルツがその場にいなかったからつばをかけられなくて済んだのか??

ちなみに、イエス様は、私たちの罪のために死んでくださり、しっかりとゴエルの責任を果たしてくださったのにもかかわらず、十字架にかかる前にローマ兵からつばきをかけられ、ひどい目に会わされている。

4:8親類の人は手続きを踏むために履き物を脱いで、ボアズに渡した。

4:9-10履き物を受け取ったボアズの宣言。

参考)マタイ13:44-46

13:44 天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。

13:45 また、天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。

13:46 すばらしい値うちの真珠を一つ見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。

持ち物を全部売り払って畑を買った、真珠を買った人はボアズ。そして、私たちを宝として、十字架上で贖いをして下さったイエス様。

「私はマフロンの妻であったモアブの女ルツを買って、私の妻としました。」ボアズは、はっきりとモアブの女のルツと結婚することを宣言している。

4:11-12門にいた人々と長老が証人となって言った言葉。

「あなたの家にはいる女」これはルツのこと。ルツが「イスラエルの家を建てたラケルとレアの二人のようにされますように。」ボアズが異邦人の女であるルツを自分の妻として迎える宣言をしたことに対して、人々はそれを受け入れている。つまり異邦人の女がイスラエルの家に入ることを受け入れている。ラケルとレアはイスラエル 12 部族の族長を生んだ母。ボアズに対しては、「エフラテで力ある働きをし、ベツレヘムで名をあげなさい。」と言っている。

「タマルがユダに産んだペレツの家」・・・タマルも異邦人で、夫に先立たれた人であった。ルツ記4:18-22のペレツの系図を見ると、ルツもその系図に入ることになり、「【主】がこの若い女を通してあなたに授ける子孫によって、あなたの家が、タマルが

ユダに産んだペレツの家のようにになりますように。」つまり、ダビデの子孫であるキリストのことを預言するかのような発言になっている。しかし、ルツはあくまでも「オベデ」を生む器として用いられたにすぎない。

4:13「主は彼女をみごもらせた」とある。このひとりの男の子は、主が生まれさせてくださった。

4:14町の女たちのナオミへの言葉

ルツ記1:20では、「私をナオミと呼ばないで、マラと呼んでください」と言っていたのと同対照的。女たちは今回のことで神をほめたたえている。

女たちは、ボアズではなく、生まれた子どもがナオミを元気づけ、ナオミの老後をみると言っています。あくまでも、聖書のストーリーは「子孫」に焦点が当たっていますね。そして、ルツのことを「あなたを愛し、七人の息子にもまさるあなたの嫁」と呼んでいる。ルツに対するほめ言葉はありますが、生んだだけ。

4:16その子を取って、胸に抱いて、養い育てたのは、ナオミでした。やっぱりナオミ（イスラエル）が主人公かなって思われます。そして、ボアズではなく、あくまでもキリストにつながっていく「子孫」を出す「オベデ」に焦点が当たっている。

4:17近所の女たちの言葉・・・「ナオミに男の子が生まれた」ルツはどこ？その子の名前をつけたのは、近所の女たち。「オベデ」は「礼拝する者」という意味だそうです。ダビデのおじいさんになる人になります。

4:18－22ペレツの家系が書かれている。ダビデにつながっているが、これが新約聖書のマタイによる福音書のキリストの系図につながる。